

「地平の哲学」序説

この論文は、現在筆者が構想する「地平の哲学」を体系的に展開するに先だって、さしあたり学説史検討の形でその輪郭を浮かび上がらせようとするものである。第一節では認識の地平性を認識の有限性として消極的に規定しつつ、この消極的側面が同時に積極的に認識の有意義性でもあることを確認する。第二節では認識の有限性 \parallel 有意義性としての地平性を言語的判断に即して説明し、第三節では以上の特徴付けを踏まえて、認識の地平性を認識する存在の地平性へと存在論的 \parallel 社会論的に転換させ、以って《地平の社会存在論》への前梯となす。

永井俊哉

第一節 認識の有限性 \parallel 有意義性としての地平性

「地平 *horizon*」はもともと「遮る *obscurer*」から派生し、そこから天文学などでは天空を遮る海や平原の線が、したがってまた海や平原を遮る天空の線が地(水)平線と呼ばれるようになった。しかし近代における認識論の興隆とともに(例えばライプニッツにおいては)視界を遮る認識の限界という意味でも用いられるようになり、この主題に取り組んだカントの哲学においても、頻繁に使われているわけではないのだが、解釈の如何では中核的な概念になっていると考えられる。

「我々の認識の全ての可能的対象の総括は、見かけ上の地平を持つ平面として、つまり我々の認識の全範囲を包括するものとして我々に現れ、無制約的総体性の理性概念と呼ばれる。経験的にそこへ辿り付くことは不可能である⁽¹⁾」。地平の向こうに何があるのだろうか、という《問いを立て》て、当の地平線まで辿り付いてみると、また新たな地平線が我々の視界の向こうに広がるのである。だがもし地球が平面ではなくて球体であることがわかれば、地平に辿り着ける(合理論)か否(経験論)か、なる〈選択II問い〉そのものが破棄される。これがカントの二律背反の解決の仕方であった。つまりこの地球の構造そのものを理解するという反省は、対象の認識ではなくむしろ認識能力そのものを吟味するカントの『批判』のメタファーなのである。

カントによれば二律背反における定立と反定立は、その見かけ上の対立にもかかわらず両方とも誤っている。一般に「二つの互いに対立する判断が一つの許されない条件「地平」を前提するならば、両者は、両者

の抗争(Widerstreit)にもかかわらず——もっともこの抗争はいかなる本来の矛盾(Widerspruch)でもないのであるが——共に不成立である⁽²⁾」。pと~pは矛盾対当の関係にあり、一方が偽なら他方は真である。しかしp・qとp・~pは反対対当の関係にあり、もしpが偽ならば、もう一方の連言肢はqであっても~pであっても当の連言は偽である⁽³⁾。その時我々は、pなる地平についてqなのかqでないかを問う代わりに地平pそのものを問わなければならないが、地平pが何であるかを問うことはpが何でないかを問うことでもあるので、このようにメタレヴェルで問うことは地平の地平が新たに出現することでもある。

「世界は有限である」という定立と「世界は無限である」という反定立は矛盾対当ではなく反対対当の関係にあり、「世界」でもって物自体が考えられているかぎり両方とも無意味である。重要なのは物自体(地平の彼方)を見ることではなく、なぜ物自体が見えないか(地平の地平性)を見ることなのである。「無知は学識ある学問的な無知であるか、それとも普通の無知であ

るかのいづれかである。∴知識の限界についての根拠を洞察することなく、またそれに心を煩わすことなく無知である人は、普通の学問的でない仕方では無知なのである。そんな人は、自分が何も知らないということさえ知らないのである。というのは、盲人が目が見えるようにならない限り暗さを表象できないように、我々は学問による以外には、自分の無知を決して考えることはできないからである⁽⁴⁾。謂う所の「学問」が「批判」である。時間空間の無限性は、実はそれを把握する我々の悟性行為の無限性なのである。カテゴリリーつまり「悟性の主観的形式」⁽⁵⁾や、あるいは時間空間という直観形式を認識の障害としてではなくむしろ認識の（したがってまた認識される対象の）可能性の制約と見なすこと、これがカントのコペルニクスの転回であった。地平は視界を遮ることによって視界を広げる。空飛ぶ鳥は、もし空気抵抗が無ければもっと速く飛ぶことができるのと思うが、もし空気が無ければ、速く飛ぶことができるどころかそもそも飛ぶことすらできなくなる⁽⁶⁾。同様に認識主観は、もし時間空間の直観

形式なりカテゴリリーなりといった主観的な制約が無ければもっとよく物自体を認識することができるのと思うが、もし主観的な制約が無ければ、よく認識することができるどころかそもそも認識することが、したがって認識の対象が不可能になるのである。カントは認識の探求の究極的な目標となる無制約的な物自体を理念と名付けるが、そのような理念は地平超越的ではなく、むしろ本質的に地平的であり、地平から発現する、つまり理念は悟性が問いを立ててそれに答える学的探求行為の統制的原理として実在性を持つのである。

全ての地平が問いの地平である必要はない。しかし問いは問いの制約である地平を顕在化する。さて一般に問いは知と無知の中間で生じる⁽⁷⁾。もし全てについて知っているならば問いを立てることは不必要であり、またもし何も知らないならば問いを立てることは不可能である。この事態を今後「地平の中間性の構造」と名付けることにする。この構造は第二節で取り上げる選択Ⅱ対立や、第三節で取り上げるコミュニケーションの現相において繰り返し確認される。問いを立てる

ことが必要であることは人間的認識の有限性を、問いを立てることが可能であることは人間的認識の有意性を示している。

さて我々は、方程式の未知数を求めるときのように、既知を手掛りに未知を既知化し、そしてこの既知によって新たに地平化される未知に対して問いを立てる。ところで我々の生命は死によって限界付けられ、時間的に有限であるがゆえに、この学的探求の果てに我々が全てを知り、したがって地平が消滅するということはない。逆に言えば、問いを地平的に立てる人間の存在の時間性が当の人間にとっての地平であるということになる。(そして実はこれがハイデガーの地平論につながる)。

もしも人間が無限な存在で、全てを認識しうるならば、ちょうど人間的視覚にとつては全き光は全き闇と変わらないように、人間は全きの無知と変わらない状態におかれるであろう。「それゆえ世界意識の基礎構造は、または全ての経験可能な個別的実在の地平としての世界の相関的な特徴を言えば、既知性と未知性の

構造である⁽⁸⁾」。視覚が成立するためには光は闇によって闇は光によって限定されなければならない。そして限定しうるということは限定することが限定されるということなのである。もしも人間の認識が(あるいは精確には認識作用としての人間が)、無限定的な、カント謂う所の純粹統覚であるならば、それは「Ja」⁽⁹⁾という分析的能力であるがゆえにその認識は誤ることはなく、そのかぎりでは無限な存在者であるのだが、しかしその認識内容は空虚で無意味である。この無限性の否定が人間の認識に存在の有意性をもたらすのである。我々の「地平の哲学」は、それゆえ、この人間の存在の被限定性⁽¹⁰⁾に有限性についての自己反省の学であると言える。

人はここで人間存在の地平的時間的有限性に定位して存在の意味を問うたハイデガーに着目すべきである。ハイデガーは、あらゆる問いの中でも最も根本的な問いである存在への問いを、存在を問いうる問いの存在(現存在)に問い尋ね、存在の意味が時間性であることを剔抉する。したがって「存在了解内容の地平として

の時間を、存在を了解しつつある現存在の存在としての時間性から根源的に説明する必要がある⁽⁹⁾。ハイデガーの言う時間性は、しかし今の連続としての水平化された通俗的(自然科学的)時間性ではなく、「既在しつつある現成化する到来⁽¹⁰⁾」なる様態を持つ先駆的決意性としての時間性である。「世界の可能性の実存論

的・時間的条件は、時間性が脱自的統一として地平とあったようなものを持っていることのように潜んでいる。諸脱自態「Erstesen 到来・既在・現在」は単純に何かへの脱出であるのではない。むしろ脱自態には、脱出の《行き先 Wohnin》が属しているのである。脱自態のこの行き先を我々は地平的図式と名付ける⁽¹¹⁾。到来なる脱自態の地平的図式は「自己自身が存在しよう」ための目的であり、既在性の図式は被投性であり、現在の図式はかく被投されながら目的へと企投しつつおのれに先んじて世界に内存在することである。我々は(R・ローティの用語で言えば)カントの《認識論的転回》からハイデガーのこの《解釈学的転回》を経た「地平の社会存在論」への行程を目指しているので

あるが、その前に《言語論的転回》を遂行すべく、さしあたりフッサールに定位して認識の地平構造を分析していくことにする。

第二節 認識地平の言語論的基底

フッサールは『論理学研究』第二巻の冒頭で「論理学を言語の究明から始めなければならない必要性⁽¹²⁾」を認めるが、後続の第一研究「表現と意味」では多義的で意味が動揺する言語的表現を突き抜けてイデア的な「意味自体」を直観する(後のフッサールの術語で言うならば)形相的還元が遂行されているので、フッサールは認識のノエシスの制約即言語地平の意義を十分に評価しているとはいいがたい。しかしこの点は我々の方で克服することにして、まずは彼の地平論を、直観のレヴェルから言語表現のレヴェルへという彼の論述の順番にしたがって検討することにしよう。

フッサールによれば「地平とは予め下図を描かれた潜在性である⁽¹³⁾」。例えば物体の隠れて見えない背面・背景的な「庭」⁽¹⁴⁾・未来予持などの顕在的知覚を取り囲

む未規定的な、しかし *mitmeinen* された *Mehr-*
meinung が地平である。「どの意識にもあるこの
Über-sich-hinaus-meinen は、意識の本質的契機とし
て考えられなければならない⁽¹⁵⁾」。「あらゆる経験は経験
の地平をもっている。つまりあらゆる経験は現実的で
確定的な知識の核、つまり直接に対象そのものを明確
に規定する内容を持つが、しかしまた、あり方を規定
したこの核、『実物がそこにある』という形で本来与え
られる核を越えて、経験の地平を持つのである。：私
のその時々目的にとっては、実際に既に経験された
もので十分ということもあるが、そう考える時私は
まさに『それで十分だ』という事態から『手を切って
いる』。というのも私はどんな規定も最終的なもので
はなく、現実には経験されるものは同一物に関する可能
の経験の地平を常に無限に持っていることを納得しう
るからである。そしてこの無規定な地平は可能性の範
囲として、さらなる規定の歩みを指示するものとして、
あらかじめ認められているもので、現実の経験の中で
初めてそのうちの特定の可能性が選り取られ、他の可

能性を押し退けて実現されるのである⁽¹⁶⁾。このような
地平の拡大においては、「予料された表象によるたんなる
解明とは対照的に、現実には進行する知覚によって、
さらに詳しく規定されたり他様に規定されたりする充
実がなされるが、と同時に新たな未決定の地平が生
じる⁽¹⁷⁾」。

フッサールはサイコロを例に採る。「サイコロは見
えない側面に関して多種多様に未決定であるが、それ
はサイコロとして、さらに特殊には色がありザラザラ
していて等々としてあらかじめすでに統握されている
が、その際これらのどの規定もが常に特殊な点に関し
て未決定になっている⁽¹⁸⁾」。もしサイコロをあらかじめ
サイコロとして統握しなければ、それが果たして立方
体であろうか？ とか、一から六までの目がちゃんと
付いているのだろうか？ などといった問いは生じな
いであろう。頭在的知覚の側面が白色である場合、
「*Und-so-weiter*⁽¹⁹⁾」の理念化によって裏も白色であると
予期される。つまり白色／非白色という種についての
選択肢が、色彩という高次の種の地元において生じる

のである。なぜ色彩地平が問題になるかといえ、それは「サイコロは物体であり、物体には色があり、かつ色の付いた裏がある」ことが先行的に理解されているからである。サイコロを手で回すというキネステーズによってこれらの問いが直観によって充実されたとしても、そのことはさらに、果たしてこのサイコロは各目が $\frac{1}{6}$ の確率で出るように精確に造られているのであろうか？ とか、すべてのサイコロはこのように白色ですべすべしているものであろうか？ といったさなる問いを生じさせるだけである。かくして我々の探求は、ちょうど地平線を追い掛けるときのように無限に進む。フッサールにおいても事物の十全的な所与性はカントが謂う意味での理念、つまり「無限な統制的理念」⁽²⁰⁾なのである。

カントは「純粹理性の理念の統制的使用について」と題した一節で、類と種が下位の種に対して論理的な「地平」になると記している。⁽²¹⁾一般に全く同じ物は対立しないが、全く違う物も対立しない。例えば「白色」と「黒色」は対立するが、「白色」と「フッサール」と

か「白色」と「7+5=12」は対立しない。両者は全く種／類が異なるからである。対立するためには種／類が同じでなければならないということは、逆に言えば共通の種／類Ⅱ地平 が対立を生じせしめるということである。そしてこの対立地平そのものはさらに普遍的な種／類の中の他の種の地平との対立によって対自化される。例えば「右か左か、それが問題である」とぼやいている人に、気をきかせたつもりで「お出口は右側の方が近うございます」と言っていると、その人は自分が空間的な方角ではなく政治思想的な方向の対立地平で問いを立てていることにはたと気が付く。——ちょうど大地を遮る天空の地平線が天空を遮る大地の地平線へと転換しうるように、不確定性の地平は有意味性の地平へとゲシュタルト的に転換するわけである。

我々は以前、問いは無知と全知の中間で生じると述べたが、この《地平の中間性の構造》は、概念の対立が完全な同一性と完全な差異性の中間で生じるといふ事態の中に観て取れる。両者の構造的同一性を具体的

な例で確かめてみよう。一般に問いには(1)「この花は白色ですか?」のように「はい/いいえ」で答えられる場合と(2)「この花は何色ですか?」のようにそうでない場合とがある。既に確認したことであるが、(1)では「この花は白色ですか、白色ではないのですか?」という選択の問いに変形できるところから明らかのように、「花」なる地平において「白色」と「非白色」が対立している。もし主語の対立地平が既知でないならば、それが白であるか否かを問うことすらできない(例えば素数が主語の地平である時を考えてみよう)。一方(2)では対立は表だっていないが、そこでは複数の色の述語の候補の中から一つを選ぶことが要求されており、一つが選ばれるや否やそれ以外の述語と対立関係に入ることになる。

有意味性としての地平性を、より根源的に言語的判断の有意味性に関して分析してみよう。フッサールは真である命題の否定をたんに偽として一括せず⁽²²⁾、次の三つに分けている…

無対象 反意味 無意味	告知/指示 意味充実作 用	欠如作用	対象の実在 意味/真理	防止法則	実例
意味付与作 用	意味の対象	文法学	「アブラカダブラ」		
					「黄金の山」 「丸い四角」

反意味と無意味の区別はしかし明解ではない。「四角ではない四角」は確かに論理的に矛盾であるが、「丸い四角」の方はそうとは言えない⁽²³⁾。「正十面体」も無意味ではないのであるが、意味充実することは不可能なので反意味ということになるが、しかしその判定は論理法則によると言えるであろうか? 真偽の判定にはむしろ意味論が必要である。また無意味のほうも、「アブラカダブラ」「緑はであるまたは」などの統語論的に無意味な場合だけでなく、「丸い四角は素数である」⁽²⁴⁾のように統語論的規則には反していないのだが、意味論的に無意味である場合も考えるべきであろう。フッサールが言う統語論的「無意味」はむしろ「非文」

とでもいうべきものであって、「ライオンは机ではない」とか「精神は像ではない」などの命題⁽²⁵⁾の意味論的な「無意味」はこれから区別すべきであろう。では、真／偽と有意味／無意味はどう区別すればよいのか？ 差し当り次のように考えよう。「四角は丸い」という命題は偽ではあっても無意味ではなく、したがってその述語を否定した「四角は丸くない」は真である。ところが「丸い四角は素数である」の場合その述語を否定した命題「丸い四角は素数でない」も前者に負けず劣らず不可解である。「四角は丸い」では述語「丸い」は主語と「凶形」なる地平を共有することができるが、「丸い四角は素数である」は述語「素数」が求める「正の整数」という地平を、いやそれどころか「数」という地平すらも共有することができないのだから無意味なのである。他方『丸い四角は素数である』は無意味である」は、無意味性という有意味性の地平によって地平化される地平を共有しているがゆえに有意味である。我々は先にカントの二律背反を $p \cdot d$ と $p \cdot \sim d$ との対立と定式化した⁽²⁶⁾が、 q または非 q が現象を地平

とする述語であるのに、それをそれとは類を異にする物自体を主語の p にすることは、ライル謂う所の category mistakeなのである。

ところで主語述語の類地平の共有という有意味性の判定基準は意味論的統語論的規則に依拠するだけで十分であろうか？ フッサールは「この軽率なは緑である dieses leichtsinnig ist grün」⁽²⁶⁾を無意味な Wortreiheの例に挙げるが、この命題を有意味に解釈する可能世界が無いわけではない。例えば黒板に緑のチョークで書かれた leichtsinnigなる単語を指差して「この軽率なは緑である」と言えば、その言明は有意味かつ真である。チョムスキーは「無色の緑色の観念が猛烈に眠る Colorless green ideas sleep furiously」⁽²⁷⁾を語の選択制限違反の無意味な文の例に挙げているが、例えば「無色の」を「緑色の観念」が文字通りの意味ではなくてエコロジスの緑の思想の隠喩であることを示している形容詞と取れば、例文は、一九七〇年にピークに達したエコロジー運動がその後衰退していったことについてのメタフォリカルな表現であると有意味

に解釈できる。要するに有意味か無意味かは意味論的統語論的規則だけでなくて、その都度の発話の文脈をも考慮にいれなければならない。しかし『論理学研究』におけるフッサールは、統語論から語用論へと探求を転換しない。彼の言語哲学の対象は「コミュニケーション的機能における表現」ではなくして「孤独な心的生活における表現」であるからである。もっともフッサールは後年にはその不十分さを認めて次のように言う。「ひとは、例えば状況依存的 (okkasionell) な、とはいえ間主観的な真偽を持つ判断の広大な領域に気が付くべきである。その判断は明らかに、個人／共同体の日常の全生活が状況の類型的な同種性に関係付けられており、その結果その状況に入るとの人も、それ自体においては正常な人間として状況に属する普遍的な状況地平を持つ、ということに基づく。この地平は後になってから説明されようが、しかしそれによって日常生活の環境一般が経験的世界と成るような構成する地平志向性は、反省する解釈よりも常に先行している。そしてこの志向性は状況依存的な判断の意味

を、言葉それ自体においてそのつど表立って明確に言われまた言われうるものをいつも遙かに越えて本質的に規定する⁽²⁹⁾。しかしひとはここで「地平はその都度の状況と生活世界的関心によって規定される」などといった空虚なテーゼ（このテーゼは何も言っていないのに等しい）に留まってはならない。重要なのは判断の地平構成の分析を通して、そこに人間の社会的存在の地平構造を読み取ることである。

第三節 地平の社会存在論へ

以上我々は、認識の有限性⇨有意味性の現象から下向して判断論的⇨言語論的基底に至ったが、今度はこれから認識主体の社会的存在の地平性へと上向する。それは判断における主語の Subjekt から判断する機能としての主体の Subjekt への転換である。私は主語を述語のもとへと包摂することによって、当の包摂の地平へと包摂されていく。そして認識の地平性としての不確定性が認識主体の不確定性へと転換されるとき、他者認識の地平が、したがってまた社会的存立の

地平が現れてくる。

フッサール自身認めるように、他者認識の問題もまた優れて地平的な問題である。私は他者の行為（例えば木を伐る行為）をその意味連関「地平」で位置付け、それが動機Mによるのか非Mによるのか（給料を貰うためなどの目的合理的な動機によるのか、それともそれ以外の気晴らしのためなどの価値合理的な動機等からなのか）という問いを立てる。もしその行為を木を伐る行為「共通類Ⅱ地平」として予め統握していなければ、このような動機「その種の種別化」についての問いは生じなかったであろう。他者認識の地平は、精神的動機の理解に対する問いによって対自化される身体性である。身体は他者を隠すことによってあらわにする。もし身体がなければ私は他者を認識することができない。だがもし他者が身体を媒介にせずして私に現れてくるならば、それはもはや他者ではなくて私になってしまふ。この正反対であるにもかかわらず、それゆえに表裏一体の無限定性の否定が他者の身体性という限定性なのである。

他者という未規定的な潜在性の地平は顕在的に現出する身体の知覚によってのみ間接呈示されるといふこのテーゼは一般に評判が悪いのだが、フッサールは次のように理由付ける。「もしも他者の固有本質的なものが直接的に接近できるなら、その固有本質的なものはたんに私の固有本質の契機となり、かくして他者自身と私自身は同じに成ってしまうであろう⁽³⁰⁾。我々はフッサールの他者論に「所詮は超越論的エゴゴキトに固執する近代哲学者の間モナド論」なるレッテルを張って終わりにするわけにはいかなのである。他者認識における身体による被媒介性は、社会認識にとって障害なのではなくて、むしろその本質的な構成契機なのである。しかしまた（これはフッサール自身の主張でもあるのだが）、他者は自我と等根源的に先与的であることも認識の地平性から帰結する。認識が地平的であることはそのへとしての述定に関して未規定的であり、認識作用が「Ich kann anders als ich tue⁽³²⁾」というように不確定的Ⅱ有 limit 的であるということである。私の認識が「他のようにも」の可能性をはらんで

いるかぎり、たとえこの地球上に私以外の意識主体がいなくなつたとしても、(身体的な \parallel 有限な) 他者は、私に(現在化されないにしても) 現前化されうるのである。

地平は、私の述定の有意味性 \parallel 述定の「他^なのようにもありうる」不確定的可能性の制約であるがゆえに、私の「他^{ほか}のようにもありうる」述定の存在つまり他者の存在の可能性 \parallel 私と他者のコミュニケーションの有意味性の制約である。このような変換を経ているがゆえに、問いの地平に関して指摘した《中間性の構造》の定式化がコミュニケーションに対しても成されうる。もしも私と他者の認識が全く同じであればコミュニケーションは不必要であり、またもしも私と他者の認識が全く違うならばコミュニケーションは不可能である。このコミュニケーションが必要かつ可能であるという生活世界的現実性は、自他の社会的存立の差異性を孕んだ同一性という地平的構造を指示している。問いを立ててそれを解決するといふ monologisch な地平超越は、今や問いに答える自他の呼応を通しての

diologisch な地平超越へと変貌するわけである。

ではこのコミュニケーションを遮ることによって可能ならしめるコミュニケーションの地平とは何か？ 我々はガーダマーとともにそれは言語であると言いたい。ガーダマーはもちろん、差し当り解釈学的に古典的テキストの理解という歴史認識に定位しているのであるが、それは(同時代の) 他者の認識と原理的に同じことである。だからこそテキスト解釈学についても次のような《中間性の構造》の定式化が成されうる…もし伝承されたテキストが我々にとって分かり切ったものであるならば解釈は不必要であり、またもしそれが我々にとって全く疎遠なものであるならば、解釈は不可能である。このことは過去の地平と現在の地平との間に時代の隔たりがあることを示している。「全ての有限な現在はその制限を持っている。我々は状況「有限な現在性」の概念を、状況が見ることの可能性を制限する立場を示すというまさにこのことによって規定する。それゆえ状況の概念には本質的に地平概念が属している³³⁾」。時代の隔たりという制限はしかし解釈

にとってあらずもがなの障害ではなく、むしろ解釈にとって積極的な可能性を与えるものであるし、だからこそそこに「著者以上に良く著者を理解する」解釈学の理念が成り立つのである。古典を理解することは、古典を現在の地平に引きずりこむことではないし、また現在の地平を飛び越えて——それは不可能なことである——歴史的な地平に埋没することではない。「むしろ理解することは、常にそのような『現在の地平と歴史的な地平という』それ自体で存在すると私念された地平を融合する出来事である」。⁽³⁴⁾「理解することにおいて現実的な地平の融合 Horizonterschmelzung が生起するが、その融合は歴史的な地平を企投すると同時に止場する」⁽³⁵⁾。

先ほど確認したように、歴史認識に関して言えることは他者認識に関しても言える。一般に他者認識とは自己を他者の立場へ移し置くことであるとされているが、「そのような自己を移し置くことは、ある個別性を他の個別性へと感情移入することでもなければ、他者を自己の尺度へと服従させることでもなく、自己の特

殊性のみならず他者の特殊性をも克服するより高次の普遍性へと上昇することを常に意味する」。⁽³⁶⁾だがこの「より高次の普遍性へと上昇すること」は、決して人間の認識に存在の有限性としての地平性を捨象して無地平性へと「超越する」ことではなく（それは以前の例で言えば、空気を超越して飛ばうとする鳥のようなものであって）、地平的存在者がその地平性を自覚することを通しておのれ的地平的被制約性から「超越論的に」自由になることに他ならない。もしも「超越論的哲学」とは「自己関係的自己反省の学」というほどのことを意味するならば、我々の「地平の哲学」は超越論的哲学ではなくて超越論的哲学であるということになるであろう。

ガーターは『真理と方法』の第二版の序言で、自分の解釈学的《Spiel》論とウイトゲンシュタインの《Sprachspiel》の理論との親近性を認めているが、実際両者はたんに言語を重視したという以上の共通性を持っている⁽³⁷⁾。周知のようにハーバマスは、ガーターが伝統と権威を復活させ、先入見と解釈学的循環のう

ちに居直ったことを、超越論的「遂行論の立場から啓蒙主義的に」批判するのだが、我々の「地平の哲学」からすれば、地平超越的なハーバマスよりもむしろガーダマーのほうがウィトゲンシュタインの言語ゲーム論を正しく継承しているのではないかと言いたくなる。ウィトゲンシュタイン以降、英米では過去や異文化の理解に対してクーンなりクワインなりがパラダイムの共約不可能性／翻訳の非決定性を主張するが、このように「地平の融合」の不確定性を自覚することが却って自己の現在の地平を地平として正しく認識していることになるはずである。「他を認識しうる」という積極的な〈能力〉の Können は、常に「認識は他でありうる」という不確定性の〈可能性〉である Können によっておびやかされている。英米系の哲学者はこの不確定性をプラグマティックに言語論的に縮減するのであるが、このように縮減することを通して、縮減する主体は言語としての社会システムの地平に組み込まれて行く。かくして我々は、認識を遮ることによって可能ならしめる地平（カテゴリー→文法→言語

ゲーム）を社会システムの構造として捉え返す課題を得た次第であるが、この地平理論の「地平」を見定めるところでとりあえず擱筆したい。

(1) I. Kant, Kritik der reinen Vernunft, A. 759 = B. 787.

(2) Ibid. A. 502 f. = B. 531.

(3) 伝統的論理学では、A（全称肯定命題）とO（特称否定命題）、E（全称否定命題）とI（特称肯定命題）が矛盾対当であると謂われるが、これは現代の記号論理学では、

AO : $(\forall x)F_x \cdot (\exists x) \sim F_x$

EI : $(\forall x) \sim F_x \cdot (\exists x)F_x$

と表現される。

AOに (1) $(\exists x) \sim F_x \equiv \sim (\forall x)F_x$

EIに (2) $(\forall x) \sim F_x \equiv \sim (\exists x)F_x$

なる恒真式をそれぞれ代入すると、

AO : $(\forall x)F_x \cdot \sim (\forall x)F_x$

EI : $(\exists x)F_x \cdot \sim (\exists x)F_x$

と変形されるが、いずれも $p \cdot \sim p$ の形をとることがわかる。次に反対対当であるが、これは次の二つである：

AE : $(\forall x)F_x \cdot (\forall x) \sim F_x$

- IO : $(\exists x)F_x \cdot (\exists x) \sim F_x$
 こゝから一見すると矛盾律のちやうであるが、それぞ
 れは(10)を代入するゆゑ、
 $AE : (\forall x)F_x \sim (\exists x)F_x$
 $IO : (\exists x)F_x \sim (\forall x)F_x$
 となり、たゞこのことがわかる。このAEの論議領域
 (universe of discourse) の中、我々の言葉で言へば平
 面の地球の諸個体を「すべてのx」を集合Dに帰属させ、
 その中、英語Hを持つ個体を集合Dに帰属せよ、と
 $AE \# (p \cdot q) \cdot (p \sim q)$ となる。IOはこのように論
 議領域「すべてのx」を代入して得られる。
 (4) Kants gesammelte Schriften (Akad.-Ausg.),
 Bd. 9, S. 44.
 (5) Kritik der reinen Vernunft, A. 287 = B. 343.
 (6) Vgl. *ibid.* B. 8.
 (7) トイトン『難問』202 A.
 (8) E. Husserl, *Erfahrung und Urteil*, 1948, *Classen*
 & Goverts, Hamburg, S. 33.
 (9) M. Heidegger, *Sein und Zeit*, 1927, Max
 Niemeyer Verlag, Tübingen, S. 17.
 (10) *ibid.* S. 326.
 (11) *ibid.* S. 365.
 (12) Husserl, *Logische Untersuchungen*, Zweiter

- Band (2. Auflage), 1913, Max Niemeyer, S. 1.
 (13) Husserliana, Nijhoff, Bd. 1, S. 82.
 (14) 1) G. 「越 Hof」# William James G. 「藝 fringe」
 と誤用する。Vgl. Husserliana, Bd. 19, S. 207.
 (15) Husserliana, Bd. 1. S. 84.
 (16) Husserl, *Erfahrung und Urteil*, S. 27.
 (17) Husserliana, Bd. 1. S. 83.
 (18) *loc. cit.*
 (19) Husserliana, Bd. 8. S. 151.
 (20) Husserliana, Bd. 1. S. 90.
 (21) Kritik der reinen Vernunft. A. 658 = B. 686.
 (22) Husserl, *Logische Untersuchungen*, S. 326.
 「カントは、この点におきて論理主義的合理主義の偏
 見のもとにあるのだが、たった一種類の真性な反意味、
 つまり形式的論理的矛盾=分析的の反意味しか知らない。
 それ故彼は、この真性を総合的のアプリオリも、全ての
 分析的のアプリオリと全く同様に否定において反意味を
 与え、また総合的のアプリオリはその意味のゆえにこそ
 純粹・絶対的に妥当することを洞察しなかった。」
 (Husserliana, Bd. 7. S. 403).
 (23) 四角は丸くはないが、丸くないからそれが四角で
 あるとは言えない。
 (24) この無意味な命題は、「現在のフランス国王は禿

げである」のように確定記述を含むわけではないが、「記述の理論」に従って、「丸くかつ四角でかつ素数であるようなXが存在する」というようにパラフレーズすれば、たんなる偽の命題となる。記号論理学は真と偽の二値しか持たないのだから当然である。だがもし論理実証主義者が「哲学的な事柄についてこれまで書かれてきたたいていの命題や問は偽なのではなくて無意味である」(L. Wittgenstein, *Tractatus Logico-Philosophicus*, 4.003)と主張しようとするならば、彼らの哲学的分析はその自己関係性のゆえに人工言語から日常言語へと移行しなければならなくなる。

- (25) これはヘーゲル謂う所の「無限判断」である。「これらの命題は正しいことは正しいが、しかし『ライオンはライオンである』『精神は精神である』などという同一的命題と全く同じように無意味である」。G. W. F. Hegel, *Enzyklopädie der philosophischen Wissenschaften im Grundrisse*, 1830, §. 173.
- (26) Husserliana, Bd. 19, S. 328.

- (27) N. Chomsky: *Aspects of the Theory of Syntax*, Cambridge 1965, The M. I. T. Press, p. 149.
 チョムスキー自身次のように付け加えている: Sentences that break selectional rules can often be interpreted metaphorically (...) or allusively in one

way or another, if an appropriate context of greater or less complexity is supplied. (ibid.)

- (28) Husserl, *Logische Untersuchungen*, S. 35.
- (29) Husserliana, Bd. 17, S. 207.
- (30) Husserliana, Bd. 1, S. 139.
- (31) 例えはフッサールにおける「問主観的還元」(Husserliana, Bd. 13, S. 447.)を想起された。
- (32) Husserliana, Bd. 1, S. 82.
- (33) H.-G. Gadamer, *Gesammelte Werke*, Bd. 1, *Wahrheit und Methode*, S. 307.
- (34) ibid. S. 311.
- (35) ibid. S. 312.
- (36) ibid. S. 310.

- (37) ガーダマーは、カントの美学に対して「Primat des Spieles gegenüber dem Bewußtsein des Spielenden (ibid. S. 110) を語って「チェスの Spielen には ein Gespieltwerden である」(ibid. S. 112) と述べた。これは後の「言語を手引とした解釈学」の存在論的転回」の伏線となっている。そしてガーダマーの謂う「遊戯」としての《Spiel》は、ドイツ語においては「賭」として確率論的な意味を持つことにも注目したい。ガーダマーによれば「そもそも究極的な意味で、ひとりだけで遊ばせようとはならぬ」(ibid. S. 111)。
 例えはひと

り、ボールと遊ぶ子供にとって、ボールの動きが自分の意志のままにならない。つまり他なるものであつて不確定であるがゆえに、ボール遊びは Spiel でありうるのである。不確定なものと遊ぶことは、私の存在の不確定性でもある。(そしてこの Spiel 論から私的言語批判を導くことができる)。ワイトゲンシュタインの Sprachspiel においても、私は主体的・能動的に規

則を作るのではなく、ただ盲目的に規則に従うだけなのだから(もちろん私はまさに「従っている」のだから、spielen する存在であるにしても)、私は言語によって spielen される存在でもあるということになる。

(一橋大学大学院博士課程)